

2018年
11月1日
No. 111
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり

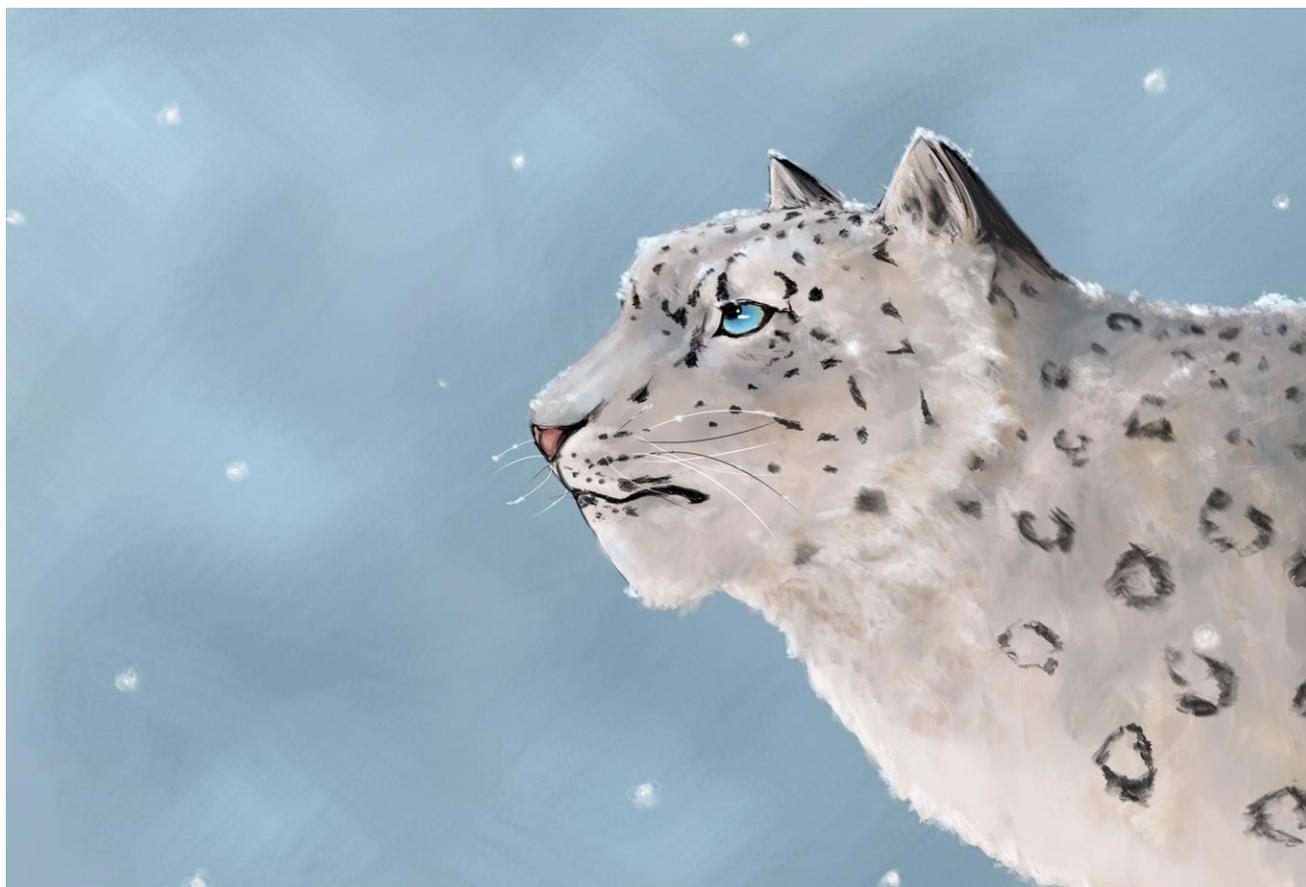


イラスト 高津



会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピアサポート基金により作成されています

Index

- 2ページ 晩秋の三角山・大倉山地域巡り登山
ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽を開催
- 3ページ ひきこもりサテライト・カフェ in 苫小牧、北広島を開催 ほか
- 4～5ページ
手紙を活用したピア・アウトリーチ開発実務者予定者研修会
- 6ページ 当事者から捉える不登校とひきこもりの理解 講演採録
- 7ページ 居場所「よりどころ」活動報告
さえきたいちさんとの対話②「自分で納得して動くことが大事」
- 8ページ こちら事務局／編集後記

晩秋の三角山・大倉山地域巡り登山く
50代の参加者が軽登山を楽しむ

10月18日木曜日、晩秋の三角山311m・大倉山307m地域めぐり登山を全員50代のメンバーで実施しました(写真-1)。これまで私が最年長でしたが私より先輩の方々が当事者会に参加するようになり頼りにしています。

山々には災害の爪痕も見られ、また落ち葉が多く間もなく冬の訪れです。三角山から尾根をつたって大倉山に移動、約4時間に及び年内最後になる軽登山を楽しみました。



(写真-1) 曇り空に浮かぶ虹(上) 大倉山展望台からスリージャンプ台を望む(下)

ひきこもりサテライト・カフェイン
小樽を開催し50代を迎えた心境

10月17日水曜日開催されたひきこもりサテライト・カフェイン小樽では当事者・家族・支援者など15名が参加。当NPOの吉川修司理事が、両親他界後の一人暮らしをする50代の立ち位置から話題提供をしました。

吉川理事は小学生の頃に小樽に住んでいた時期があり、不登校気味だった過去を振り返りながら「あれから40年経つが何も変わっていないように思う」と語り、親とのすれ違いから病気で亡くした父親の面倒をみきれなかったことについて「亡くなった親があのお世で待ち構えているようで怖くなるときがある」と生活の節々に両親の影響が色濃く残っている現状を述べました。

またひきこもりピアサポート活動について「私もこれまで講演会や家族当事者と話し合う現場は相当経験してきたが、なかなか慣れない。当事者のなかには体験発表してそれが自己実現につながる人もいるが、大半の当事者はそれができない。当事者も前面にでて華々しく活動する人もいればそうでない人もいます。前向きな活動をしている人だけが評価されるのではなく、極端なことをいえば家から出たくないならその状態で自分のできることをすればよい。そこにサポートすることはできないものか」と現状の就労支援のあり方にも言及し、吉川理事が自分のできることとして在宅でもできる「インターネットオ

ーションンへ」について説明し、在宅ワークでいかにばかりかの収益をあげている状況が報告された。

両親が亡き後も就職や仕事に就くための準備をしてこなかったことについて「私の場合は親子関係だけに問題があったとは思えない。履歴の空白が長いことや外出しない生活が続くことで社会の中で生きていく感覚が相当鈍化しているように思うが、一人で独居生活は悪いとは思えない」と述べ、50年生きてきた現在について「30代までは社会に適応することが必要だと感じ就労へ向けて訓練も受けた時期があったが、最終的には就労することとはなかった。50代ともなればさすがに自分の氣質が組織に向かないことを変えることは逆に自分を打ち消すことにもなるためあきらめている」と今の心境を述べました。

最後に「ひきこもりながら生きることがこれからのテーマ」だと述べ「人生は祭りだ」という昔の映画で語られたセリフを引用して「自分ができることをして楽しみがもてるような人生にしていきたい」と残された人生の指針を語りました。参加者からは「吉川さんが過酷な状況とも受け止められるが、意外に自分なりの生活を楽しんでいるようにも感じる」などの肯定的な意見や「こうあらねばならない理想の親子関係をやめて、親から逃げたいときには逃げてはどうか」といった意見も出され参加者相互の交流が活発に行われました。

今後のサテライト・カフェイン開催日程については、8ページを参照してください。

ひきこもりサテライト・カフェ in 苫小牧②③を開催

9月13日木曜日、胆振東部地震の影響が懸念されるなか、「ひきこもりサテライト・カフェ in 苫小牧②」を開催、当事者、家族、支援者、議員など22名が集まりました。恒例の当事者からの話題提供に加え、前段、苫小牧市総合福祉課福祉相談担当の山吹健司・社会福祉士から苫小牧市のひきこもり支援情報の提供が行われました（写真1-3）。

当事業にあたっては市内でお互いこれまで面識があったものの関係機関が一堂を介して協議する機会がなかったことからカフェ事業は連携の促進にも寄与しています。また地域活動支援センターや相談事業所の専門職のほかインフォーマルセクターの不登校の家族会やひきこもり家族会の代表者も参加しており、それぞれの団体機関のスタッフと出会うことがきっかけとなり具体的な支援につながる契機にもなっています。また参加者からは「日頃心の内を吐き出す場がない、こうした



引きこもりの人や家族、支援者などが集まって語り合う「ひきこもりサテライト・カフェ」が13日、苫小牧市民活動センターで開かれた。20人が参加し、不登校と引きこもりを経験した30代の男性の体験談に熱心に耳を傾けた。

（写真-3）9月17日付苫小牧民報には体験談を発表した大橋伸和氏の記事が掲載された

場を通して情報交換し家庭に持ち帰りたい」との意見があり、同じ境遇でなければわからない体験や勇気を得られました。

10月11日木曜日開催された「ひきこもりサテライト・カフェ in 苫小牧③」では、東から素敵な現役大学生5名が視察に訪れ、終了後スタッフ関係者との懇談のときをもちました。大学4年生であることから進路の話題にも進展しましたが、それぞれ決めていることや模索状況が伺えました。

ひきこもりサテライト・カフェ in 北広島③④を開催

10月4日（木曜日）に開催された「ひきこもりサテライト・カフェ in 北広島③」では、3名の家族のほか支援者を合わせ9名の参加者がありました。話題提供は当NPOの武田俊基理事が担当し、参加者からは「初めて当事者会に参加したときの心境」「家族はどのように当事者と関わればよいのか」など質問がだされ、支援者は熱心に家族のことも悩みに耳を傾けていました。

11月1日（木曜日）に開催された「ひきこもりサテライト・カフェ in 北広島④」では、ピアサポーターの中條寛大さんが話題提供しました。内容について次号で報告します。胆振東部地震の影響で第二回目は中止になりましたが、今年度の会期日程は終了しました。協力いただいた関係各位のみなさま、ありがとうございました。

よりどころ 当事者会&親の会合同企画

『ひきこもりカフェ in 札幌』開催のお知らせ

2019年3月の「よりどころ」では親の会、当事者会が合同で「ひきこもりカフェ」を開催する。当事者、親双方の講師にそれぞれ思いを語ってもらうことで、今後の居場所のあり方や生きやすい社会とは何かを考えていきます。ぜひご参加ください。

講師：マインド氏（旭川当事者会 NAGI）

鈴木祐子氏（小樽不登校ひきこもり家族交流会世話人）

開催日時：2019年3月4日（月）午後1時～4時まで

開催会場：北海道立道民活動センター「かでる2.7」10階 1060会議室

（札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル）JR札幌駅南口から徒歩13分

利用対象：ひきこもり当事者及びその家族

参加費：無料 事前申込不要 直接会場にいらしてください（出入り自由）

手紙を活用したピア・アウトリーチ開発実務者予定者研修会 5名の講師から理論と実技を学ぶ

9月29日(土)～30日(日)2日間にわたり、「手紙を活用したピア・アウトリーチ開発実務者予定者研修会」が開催された。この研修会では、現在当NPOが実施している長期在宅状態で外出が困難なひきこもり当事者に対して郵送する絵はがきによるアウトリーチを担う実践者や関心あるピアサポーター実践者を対象にひきこもりピアサポートの心構えや絵はがきを作成のノウハウを学習した。初日には遠く稚内や帯広、旭川など定員20名の参加があった。この研修会に招聘された5名の講師陣による講義並びに演習の内容をまとめた。



(写真-1)

長谷川 俊雄 氏

ひきこもり支援におけるソーシャルワークとピアサポート

白梅学園大学子ども学部・教授の長谷川俊夫氏(写真-1)は、横浜市と川崎市で不登校やひきこもり、生きにくさを感じる人たちのための居場所を開設するNPO法人の役員でもある。長谷川俊夫氏は、かつて横浜市の福祉職として長く相談援助をするなかでひきこもりの存在を知り、日本初のひきこもり家族教室を開設した。元来、社会福祉援助がとりこぼしている問題に関心が強く、単に右肩上がりのリハビリテーションモデルのひきこもり支援、つまり就労することがゴールである支援がいまだに国が主導して続けられている現状を憂い、支援は本人と一緒に石橋をたたいて渡るような関係性の中で作りあげていくものと考えている。そして「経済的」「文化的」「関係的」「実存的」の4つの貧困を当事者が重層的に抱えることから発生する「生きることへの絶望」を阻止するため、ソーシャルワークがもつ社会と当事者をつなぐ関わり方が重要であることを指摘した。「困難を抱えながらも生きている当事者が尊敬されるような社会を構築したい」と語る長谷川俊夫氏は日々の自助会活動で当事者から学ぶ謙虚さが伝わる内容であった。

ひきこもりアウトリーチとピア実践

立命館大学産業社会学部教授の山本耕平氏(写真-2)は、冒頭、日本における就労支援中心の若者支援が失敗した点を強調した上で、ひきこもり支援における暴力性、権力性という課題にも言及し次のように述べた。「社会的ひきこもり支援に関わる支援者は他人様の生き方に口出しし、恐れ多くも他人様の人生そのものに介入する」。介入することの意味は支援者が当事者に対して権力的になる習性をはらんでおり、プロスタッフとピアスタッフが権力性や暴力性を克服し当事者、家族、地域住民が果たす役割を築いていく必要性を述べた。さらに当事者は支援組織に忠誠させられる危険性があり、いじめの体質を温存する支援には抵抗するといった指摘とともに、組織ではなくそこにいる人(スタッフ)とともに人生を築いていけると考えたとき「支援—非支援」の関係性が「共同の関係性」に変化することが、山本耕平氏が長年の相談援助活動からみえてきたことであると振り返った。ひきこもり支援は社会への再適応のためではなく意味ある人生を送るためにある。当事者と支援者が支援体制を「一緒に築いていく」という視点が必要となる。



(写真-2)

山本 耕平 氏



(写真-3)

中川 健史 氏

古くて新しい『文通』という試みでつながった若者たち ～手紙、はがきによるひきこもり支援の可能性

NPO法人仕事工房ポポロ代表の中川健史氏(写真-3)は、校内暴力がピーク期を迎えた1980年頃から学習塾を運営しながら非行少年たちと交流をもち、その後不登校ひきこもり支援に携わり、現在は岐阜市で仕事工房ポポロを立ち上げたのを皮切りに10団体以上の支援ネットワークづくりを実現した。

前段で中川健史氏は「日本では中年期の支援に関する法整備がなされていないため、働き盛りの世代が追いやられている」と述べ「悶々とひきこもる生活

を余儀なくされている人たちが多く理由は彼らに出番をつくらなかったから」と現状の若者支援の課題を挙げ「出番」と「役割」の重要性を強く訴えた。

中川健史氏はこれまでに手紙を通して出会ってきた若者について触れ、「自立とは何かを尋ねてきた若者の問いに対して、毎月発行している機関誌ニュースレターの読者が答えるといった一対多数の関係を重視している」と述べ、一方的な葉書送付とは違う特色がみられた。また「たった一通届いた手紙が広い意味での居場所につながる」可能性についても指摘し、転職を繰り返し定着してこなかった人たちがこれからの地域づくりに欠かせないという認識をどこかにもっていく必要があると述べた。

初心者でもできる絵はがきづくりを体験（実技演習）

長男の不登校をきっかけに小樽市で不登校・ひきこもり家族交流会世話人を続けている鈴木祐子氏（写真-4）は、20年以上にわたり当事者宅へ絵はがきを送り続けている。研修では日常生活にある新聞紙や道端にある落ち葉、100円ショップに売られている材料を駆使して個性ある作品づくりの魅力を紹介した。

鈴木祐子氏は絵はがきづくりのポイントとして、「短時間にできるので難しく考えない」「本人が拒否したら中断」「はがきを書く内容は意図をもたず近況や時候などに留め、慣れてきたら日常の気にとまったことなどを加える」「切手は珍しいものや相手の好みに合わせる」などを挙げ、長年継続してきた絵はがきの活動から「回を重ねることで応答がなくても何かしらの交流につながる」「はがきの送付が間接的に社会と接する疑似体験にもなる」と、その意義を述べた。

研修では鈴木祐子氏の指導のもと、参加者が思い思いの絵はがきをつくっていたが、地震災害の新聞紙面のみでは絵を作成するといったテーマ性のある表現をしていた参加者もみられ、各々が創意工夫をこらした絵はがきをつくる機会となった。



（写真-4）

鈴木 祐子 氏



（写真-5）

岩田 光弘 氏

堺市におけるひきこもり支援～サカイ式すべらないグループワークとひきこもりピアサポーターによる実践

前・堺市こころの健康センター相談係長の岩田光弘氏（写真-5）は、2006年から2017年まで大阪府堺市のこころの健康センターでひきこもりの相談支援を担当してきた。2009年から開始したサカイ式すべらないグループワーク（SSG）とは「安心してすべれるグループワーク」という北海道浦河にある「へてるの家」の真逆の発想からきており、個別のニーズに応じた「テーラーメイド」の企画が特徴である。聴くだけで交流なしの講座や特定の事例に焦点をあてた少人数企画などを打ち出し、当事者が講師を担うこともあった。SSGの雰囲気は全体的に緊密すぎないゆるさがあり、自己開示しなくてもいるだけでもよいというスタンスが参加者を安心させてきた。

岩田光弘氏は2013年から3年間「堺市ユース・ピアサポーター養成派遣事業」に着手し、ひきこもり相談の利用を経て社会参加を目指す就労に至らない方を対象に養成講座を実施し、ピアサポーターによる集団支援を実現させた。ピアサポーター同士が集い「安心してすべれるサポーター会議」を実施するという既成概念の枠を外したゆるさが事業成功の秘訣といえる。



同研修会に合わせて開催した「第2回及び第3回手紙を活用したピア・アウトリーチ開発事業推進委員会」では、絵葉書によるピア・アウトリーチ希望者の担当者役割分担を行った。2019年3月までの期間、研修会で学んだことを活かし絵はがきづくりを実践する。ひきこもり支援は就労一辺倒の支援では限界がある。緩やかにアウトリーチを図る絵はがきによる郵送支援のあり方を再考し、官民あげて出番と役割を演じられるピアサポート育成に期待したい。

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

当事者から捉える不登校とひきこもりの理解 ～地域の民生児童委員に求められるもの 《講演採録》

小樽市の民生委員児童委員が活動の中で遭遇する不登校やひきこもりで悩む当事者や家族に対しどのように接すればよいのか。

10月6日に開催された小樽市民生委員児童委員協議会児童福祉部会研修会では当NPOの田中敦理事長が、不登校や中学浪人、ひきこもった経験をもつ、いち当事者の立場から、不登校ひきこもりの理解に求められることを語った。

◇教育熱心な家庭に育つ

私は現在52歳です。生まれた当時、父は公務員で転勤族、母も女性の社会進出が乏しい時代としては珍しく会社員として働いていました。七つ違いの兄がいますが、教育熱心な家庭で育つたため、中学入学と同時に高い教育を受けさせるために親元を離れ札幌に住む祖父母に預けられました。

兄は小学校の頃から生徒会長を務め、成績はいつもトップを維持するほどの秀才で、国立の大学へ進学し一流企業へ就職していききました。私はそんな優秀な兄に比べられながら親から「血がながっているのに、何でお前はこんなにできないんだ」と叱られることもありました。

◇風(たこ)糸がすり減る過程をみる

私は小学一年から学校から帰ると学童保育に預けられ夕方まで過ごし、その後も近所の家庭に預けられ夜遅く帰る両親を待つ毎日を送っていました。当時を振り返ると、もう少し親が早く帰宅して一緒にご飯を食べてほしかったとか、一緒に遊んでほしかったと思います。子ども心に親や大人に対する希望や願いはあるものです。不登校ひきこもりになる

きっかけはさまざま。そこに至るまでのプロセスや背景に着目することが支援者には求められます。ある不登校経験者が空に飛ばす風に喩えて、不登校やひきこもりになることを風糸が切れた状態だと述べていましたが、その糸が切れる手前にすり減っていく過程が私にはありました。この過程を支援者がみていく必要があります。

◇身体は登校、心は不登校

私は親の転勤で苫小牧、函館など道内を転々としていきましたが、一番辛かったのはやっと環境に慣れ、友だちができたところに転校しなくてはならなかったことです。小学4年生のときには周囲に馴染めず勉強も得意ではなかったため保健室登校を余儀なくされました。担任教師は私を保健委員にして保健室に通っている形にすれば保健室登校ではないと考えたのかもしれませんが、でもここで考えてほしいのは、身体は登校しても心が不登校のまま良いのかということです。不登校になりやすい人は感受性が高く、周りに気を使うため神経やエネルギーを使います。子どもの内面を見ずに形式的に登校させても解決にはならないことを理解してください。

◇家族支援の重要性

私が不登校になったことで母親は精神的に不安定になり仕事を辞めました。不登校になった原因をつくったのは親の責任だと考えたからです。自分が原因で離職したことは私にとっても罪悪感になりました。不登校の課題を閉ざされた家族だけで解決しようとする問題点がみえてきます。だからこそ不登校ひきこもり支援で大事なものは、当事者本人への支

援と共に必要な家族支援であると思います。

家族支援において重視すべきは単なる機関や制度の情報提供ではなく、安心して不登校やひきこもりの相談に対応してくれる人がいることを紹介することです。また、支援者側の熱心過ぎる関わりは逆に当事者や家族を委縮させます。支援者は「決して無理はしない。けれど目は背けない」で関わり、不登校やひきこもりの人たちが声を出しやすいコミュニティにつくりかえていくための理解啓発普及活動を行うことが大切だと考えます。

◇人生とはリカバリ

私は中学浪人を経験しています。通っていた予備校ではじめて勉強の面白さや楽しさを知り、仲間の大切さを体験しました。再受験して人より遅れて入学した高校では、初めて自分の意志で図書館に入りました。そこには不登校経験を持つような自分と似た生徒が多くいました。図書館業務をこなすことで社会性も身につきました。図書館業務をこなすことでも出会い、高校卒業後は大学で社会福祉を学び現在のNPO活動を始める原点になりました。私は福祉を学ぶなかで「リカバリ」という理念を知りました。人生とは曲がりくねり、ときには後ずさりしながらしかし再出発することができる、それが「リカバリ」です。不登校もひきこもりもひとつの人生としてとらえ、それを糧にして次のステップを築いていくことができます。当事者が本来持つ力を活かしたりリカバリでできることが彼らの力が発揮できる地域をつくるのが相談業務を拡充すること以上に重要で、それが本来あるべき支援の姿だと思います。

札幌市の委託事業 居場所「よりどころ」活動報告

札幌市の委託事業「集団型支援拠点設置運営業務」居場所「よりどころ」の当事者会、親の会が9、10月にそれぞれ1回開催されました。

10月1日に開催された当事者会には7名が参加して、ゲームで遊ぶグループ、対話をするグループの2つに分かれて進行了ました。

ゲームのグループでは外国のカードゲームで盛り上がる場面もみられみなさん楽しいひとときを過ごしました。

対話のグループでは参加者の趣味を尋ねて話題を深めました。音楽を聴く、外国語をならう、ボランティア活動に励むなどひきこもる中でやりたいことを実行しているようでした。

共通する話題として交通費や日頃のお小遣いの使い方など金銭的な課題が多くみられました。当事者のみなさんも気苦労が多いことがわかりました。

10月22日に開催された親の会には31名の参加者がありました。北海道胆振東部地震から1か月が経過して落ち着いたこともあり地震直後に開催された9月の親の会よりも大幅に参加者が増えました。

「よりどころ」開催のご案内(11月～2019年1月)

(当事者会)

- ⑥11月5日(月) 1階・110会議室
- ⑦12月3日(月) 1階・110会議室
- ⑧2019年1月7日(月)3階・310会議室

(親の会)

- ⑥11月19日(月) 3階・310会議室
- ⑦12月17日(月) 3階・310会議室
- ⑧2019年1月21日(月)3階・310会議室

開催会場：北海道立道民活動センター「かでる2.7」(札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル)JR 札幌駅南口から徒歩13分
開催時間：いずれも午後1時～4時まで
出入り自由 参加費は無料

「よりどころ」は札幌市から当NPOが受託し、札幌市ひきこもり地域支援センターと協同で実践する北海道内初の居場所です。サロンを訪れるような気持ちで気楽にお越しください。また、ひきこもり地域支援センターから精神保健福祉士などの資格をもつ相談員が1名参加しますので、個別相談を希望される方もお待ちしております。



ひきこもり外交官

さえきたいちさんとの対話②「自分で納得して動くことが大事」

日本各地のひきこもりの現状を伝える「ひきこもり外交官」ことさえきたいちさんへのインタビュー第2回目です。(聞き手・吉川修司)

当事者が現状から変化を遂げるため、親が特に気をつけておくことは何でしょうか

当事者本人が今の状況を把握して、これからのように生きていくかを考えていければ、仕事をしたいなくてもある種の解決とっていい。あとはどうにでも本人がやります。当事者は理不尽な親子関係、学校でもいじめなど嫌な思いをしているために社会参加するための経験不足が多いので、その点だけは考慮してサポートしてほしい。押し付けがましく親が助言したことをやらせて、もしも失敗したら親を恨みますよ。自分が決めたことで失敗したら他のせいにはできないから自分でどうにかするしかない。自分で考え納得したことはそれなりに考えて動くので成功すると思う。

ひきこもりは犯罪予備軍であるといったマスコミ報道が最近ありましたが、当事者を引き出して社会へ更生させるような考え方はどうですか

引き出し屋のような暴力による支援は当事者や家族を他の相談機関に行かせないように困り込んでいます。弱っている精神状態で、強制的な訓練をさせても大半の人たちは余計に心を病んでしまうだけで意味はないと思う。

ではどのような支援機関に相談すればよいですか

支援機関の良し悪しではなく、支援機関にいる人をよく見極めることが一番です。信頼できる人、安心できる人を見来分けるのは難しいですが、精神科医だから良いとかではないわけで、肩書ではなく一人のひととして当事者や家族を大切に扱ってくれるような人間性をもつ人との出会いが大事です。

(次号へつづく)

◆「SANGOの会」例会のご案内

2018年11月は下記日程にて行います。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話で問い合わせのうえ初心者の例会にお越しください。

《通常の例会》

とき：11月12日(月)午後1時30分から3時30分まで

会場：札幌市社会福祉総合センター札幌市ボランティア活動センター4階研修室B

(札幌市中央区大通西19丁目1-1 地下鉄東西線西18丁目駅下車1番出口から徒歩3分)

《初心者の例会》

とき：11月28日(水)午後5時30分から7時30分まで

会場：北翔大学北方圏学術情報センター・ポルト3階 ミティングルーム

(札幌市中央区南1条西22丁目1-1 地下鉄東西線円山公園駅下車徒歩5分)

《通常例会・初心者例会予定》は随時、当NPOのホームページで公開し

ていきますのでご確認ください。<http://letter-post.com/>



◆「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽」開催のご案内

今後の開催スケジュール(11月以降)

11月21日(水) 12月19日(水) 2019年1月16日(水) 2月20日(水) 3月20日(水)

とき：午後2時00分から午後4時00分まで 出入り自由

会場：小樽市総合福祉センター4階和室(小樽市花園2丁目12番1号)

参加対象：ひきこもり当事者及びその家族など 参加費：無料 ※事前申し込み不要

後援：小樽市、社会福祉法人北海道社会福祉協議会、北海道新聞社

告知案内：小樽市のホームページ <https://www.city.otaru.lg.jp/>

◆一日福祉セミナー「ひきこもりについて考える」開催のご案内

講師：田中 敦(当NPO理事長)

とき：12月5日(水) 13:30~15:30

会場：札幌市社会福祉総合センター4階

場所：札幌市中央区大通西19丁目(地下鉄西18丁目駅下車徒歩5分)

参加費：500円 定員：30名

申し込み方法：電話、FAX又はEメールで申し込みください。

申し込み/問い合わせ先：社会福祉法人札幌市社会福祉協議会ボランティア活動センター

(TEL) 011-623-4000 (FAX) 011-623-0004

◆「ひきこもり本人や家族に寄り添う支援とは・・・」セミナー開催のご案内

講師：田中 敦(当NPO理事長)&ひきこもり当事者数名

とき：12月22日(土) 13:30~16:30

会場：札幌エルプラザ4階・大研修室(札幌市北区北8条西3丁目)

参加対象：ひきこもり当事者とそのご家族、関係者、支援者

参加費：無料 定員：90名(先着順)

申し込み方法：申し込み用紙に必要事項を記入の上、FAX又はEメールでお送りください

申し込み/問い合わせ先：北海道ソーシャルワーカー協会事務局 にいぬま様宛

(TEL) 0134-61-1007 (FAX) 0134-61-1772

☆ 編集後記 ☆

初冠雪の便りとともに年内最後の会報をみなさまにお届けします。これから日も短くなり、だんだん寒くなりますので体調にはじゅうぶん気をつけてお過ごしください。(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください